

## 幼児の死の概念

呉大学看護学部 竹 中 和 子\*

兵庫医科大学病院 藤 田 ア ヤ

福島生協病院 尾 前 優 子

**論文要旨** 子どもの死の概念に関する多くの研究は、学童期以降を対象にしている。しかしながら、3歳児でも死について考えており、死の不安を言葉で表現したという報告もある。病気を持つ子どもへのインフォームド・コンセントやデス・エデュケーションの問題を考えるうえでも、幼児期からの死の概念の発達について明らかにしていくことが必要である。

本研究では絵本を基に作成した紙芝居を用いることで、幼児期のうち簡単な質問なら答えることのできる3歳以上の健常幼児における死の概念について明らかにしようとした。調査の結果、以下のことが明らかとなった。(1) 死の不動性は、4歳7ヶ月から理解し始め、6歳前後でほとんどの幼児が理解していた。(2) の不可逆性は、3歳9ヶ月から理解し始め、6歳前後でほとんどの幼児が理解していた。(3) 死の普遍性は、4歳3ヶ月から理解し始め、6歳2ヶ月以上でほとんどの幼児が理解していた。(4) 幼児における死の概念の発達には身近な死の経験、アニミズム、マス・メディアなどの要素が関わっていることが予測された。(5) 年少の子どもに対しても、生の問題として死を考えるデス・エデュケーションに取り組んでいく必要性が支持された。

**キーワード：**幼児、死の概念、アニミズム、デス・エデュケーション

### ■ はじめに

子ども、とりわけ予後不良の疾患をもつ子どもにインフォームド・コンセントを行うことは、患児の不安を軽減し、感情表出を助け、情緒の安定をはかるうえで重要だと考えられる。特に対象が幼児の場合は、ひとりひとりの発達を考慮したアプローチが必要である。しかしながら、幼児における死の概念の発達について、詳細は明らかになっていない。その背景として、死がタブー視されてきた問題であること、また年少の子どもを対象とする場合、死についてどう認識しているかの査定方法が難しいことがある。

子どもの死の概念に関する研究は1930年代頃より行われているが、盛んに行われ始めたのは1970年代である<sup>1)</sup>。一般的に5～7歳になれば、約6

割の子どもが、不動性 Nonfunctionality、非可逆性 Irreversibility、普遍性 Universality という死の概念を理解している<sup>1)</sup>といわれている。岡田<sup>2)</sup>は、Piajet の認知的発達理論に基づいて小学1年生から6年生の健常児と病児を対象に認知発達テストを行い、前操作段階、具体的操作段階、形式操作段階に分け、死の概念の発達について調査した。その結果前操作段階で、すでに7割近くの子どもの死の不動性、死の普遍性、死の普遍性を理解していた。子どもの死の概念は、認知発達の段階に伴って形成されていくと考えられる。また岡田<sup>2)</sup>は死のイメージについても調査し、その結果病児は、健常児より「悪い」「醜い」といったイメージや感情を抱いていたとしている。死の概念をどのように形成していくかということは、子どもが成長・発達過程でどのような死にまつわる体験を

\*連絡・別刷請求先

たけなか かずこ

〒737-0004 呉市阿賀南2-10-3 呉大学看護学部

したかということも大きく影響していると考えられる。

子どもの死の概念を扱った多くの研究は、学童期以降を対象にしている<sup>1),2),3)</sup>。しかしながら、3歳～5歳で11%が死について考えており<sup>4)</sup>、また、予後不良の病気のため入院している3歳10ヶ月の女児が、死の不安を言葉で表現したという報告もある<sup>5)</sup>。病気を持つ子どもへのインフォームド・コンセント<sup>6)</sup>やデス・エデュケーション<sup>7)</sup>の問題を考えるうえでも、幼児期からの死の概念の発達について明らかにしていくことが必要である。

学童とともに4歳以降の幼児についても調査している研究<sup>4),8)</sup>もあるが、方法は質問紙に基づく面接法を用いているものがほとんどである。幼児期はピアジェによる前操作的段で、幼児にみられる自己中心性やアニミズムに特徴づけられる<sup>9)</sup>。言い換えれば、説明が現実即している場合は理解できるが、一般化して考えると、一般的な問題から特定の問題を推論することはむずかしい。したがって、幼児に言葉による面接を行っても、理解することが容易ではなく、幼児の反応は得られにくいと考えられる。一方、絵本や紙芝居は幼児が日常的に経験していることで、親しみやすく、楽しい遊びのひとつである。また、絵や語りにより、興味を持続でき、内容も理解しやすいと考えられる。

そこで本研究では、絵本を基に作成した紙芝居を用いることで、幼児期のうち簡単な質問なら答えることのできる3歳以上の健常幼児における、死の概念および死のイメージについて明らかにする。さらに幼児期におけるデス・エデュケーションの重要性と可能性についても考察する。

## ■ 用語の操作的定義

**死の概念**：本研究ではSpeece, & Brent<sup>1)</sup>による死の概念の構成要素である、**死の不動性**（体の機能の停止：動く、手足があるといった目に見えること、考えること、感じることなど目に見えないこと）、**死の不可逆性**（一度死ぬと生き返れないこと）、**死の普遍性**（命あるものは、必ず死んでしまうこと）の3つの側面からとらえる。

**アニミズム**：自分自身にかかわっているものあ

るいは影響するものが生きているとする。幼児がアニミズムを表現する時、その対象と生き生き（感情的に）とかかわっているのである<sup>10)</sup>。

## ■ 研究方法

### 1. 調査対象

A市内のB保育所に通っている3歳から6歳の幼児のうち、「紙芝居を聞いてくれる？その後少し質問してもいい？」とたずね、同意が得られた35名を対象者とした。年齢は3歳9ヶ月～6歳7ヶ月、平均年齢は5歳1ヶ月、SD=9.5、男児は21名、女児は14名であった（表1）。

表1 対象者の年齢、性別

	男児	女児	合計
3歳児	1名	1名	2名
4歳児	10名	6名	16名
5歳児	5名	4名	9名
6歳児	5名	3名	8名

### 2. 調査方法

調査期間：19XX年12月の2日間

調査場所：B保育所遊戯室

調査者：H短期大学3年次生2名

調査手続き：図1に示す手順で行った。

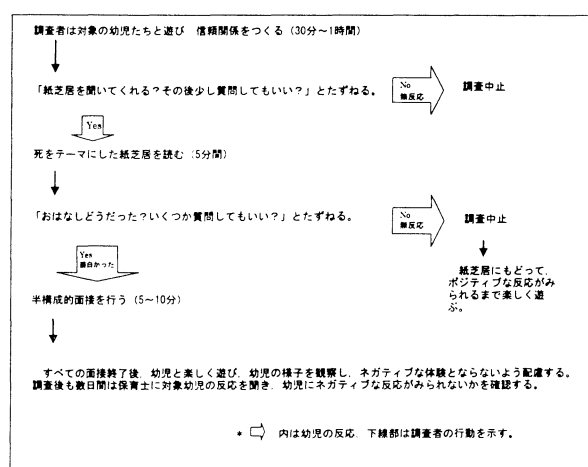


図1 調査手続きの過程

調査者1名が幼児1名に紙芝居を読み、その後面接を行った。別の調査者が幼児の反応を記録した。また、「死の不動性」の質問を行う時は、そ

の動作を行っているアナグマのイラストを書いたカードを用いて幼児の反応を引き出しやすいように配慮した。さらに、面接終了後、幼児が死に対して少しでもネガティブなイメージを抱いていた場合は、ポジティブな反応が得られるまで紙芝居にフィードバックし、対象者の心理状態に配慮した。対象者全員の面接が終わった後、幼児と遊びを通して関わりを持ち、対象幼児の反応を観察するとともに、保育士に調査実施後の幼児の様子を確認した。

調査に用いた紙芝居は、スーザン・バーレイ作・絵「わすれられないおくりもの」(評論社, 1986)を一部省略して作成した。省略した理由は、対象者が幼児であるため紙芝居が長いと集中力が続かないこと、絵本の内容に面接の反応を左右しうる場面(死の不動性「散歩する」の結果に影響を与えると考えられるアナグマがトンネルを走る場面)があったことである。この絵本を選択した根拠は、死をテーマにしていること、死に対してネガティブなイメージを与えず分かりやすい構成になっていることである。

問の表現を修正し実施した。また、調査者は、本調査実施前に2日間保育所を訪問し、幼児と遊び、幼児や保育士と信頼関係を築いたうえで本調査に臨んだ。

#### 面接内容および進め方:

質問項目は、Speece & Brent<sup>1)</sup>が行った調査の時に用いられた死の概念の構成要素と、岡田<sup>5)</sup>にあげられている質問項目を参考に作成した。面接内容および面接の進め方の実際は図2に示した。

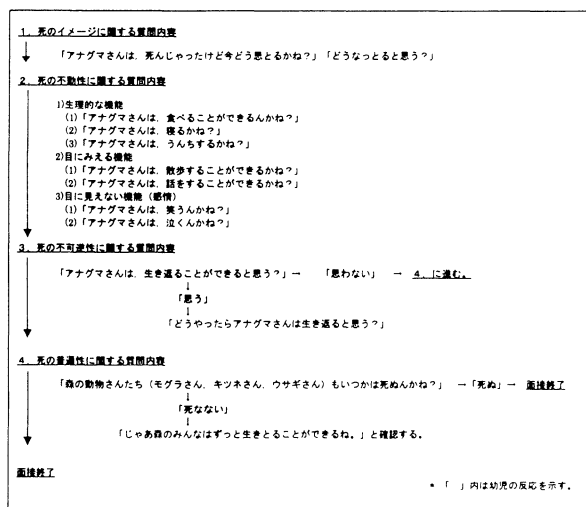


図2 質問内容と面接の進め方

### 3. データ分析方法

分析はMicrosoft excelを用いて、年齢・質問項目に分けて集計した。また、調査者2名の結果のうち一致しないものは、調査者間で話し合い、最終的には幼児の正面から面接を行った調査者のデータを結果とした。2名の調査者による評価一致率は、言語的な反応では0.92、幼児の表情については0.74だった。

死の概念の構成要素である死の不動性、不可逆性、普遍性と、死のイメージについてそれぞれ分析する。

### 4. 倫理的配慮

調査実施に際しては、本研究の目的および方法を十分に説明し、調査の実施および協力の了解を得た。また、事前に幼児や保育士との信頼関係を築いた上で調査を開始し、調査中も幼児の人権を最優先として、幼児に不利益がないよう細心の注意を払った。調査実施後は、幼児が楽しい体験ができるよう遊ぶ時間を持ち、幼児の反応を観察するなど配慮した。さらに、保育士の協力を得て、調査後の幼児の様子について確認した。得られたデータは対象幼児の年齢、性別のみ使用し、個人が特定されないよう配慮し、守秘に努めた。

### ■ 結果および考察

対象者のうち3歳男児1名は、紙芝居を読み終わった後全く反応が得られなかったため、手順にしたがって調査を中止した。この1例については分析データに加えなかった。

#### 1. 死の不動性について

生理的な機能(食べる・ねる・うんちをする)に関しては図3～5に、目に見える機能(散歩をする・話をする)については図6, 7に、目に見えない機能(笑う・泣く)については図8, 9にそれぞれ示した。年齢とともに死の不動性の理解が進む結果となった。5歳児において特に「寝る」や「散歩する」, 「笑う」と答えた幼児が否定した幼児よりも多かった。「死んで悲しいから泣くことができる」という反応, 「死んで天国にいる」という反応から、死後の世界でアナグマは生き続けていると考えていることが予想される。これは、アニミズム<sup>10)</sup>の表れのひとつで、5歳児が4歳児よりも絵本を通して、たとえば天国で、笑っ

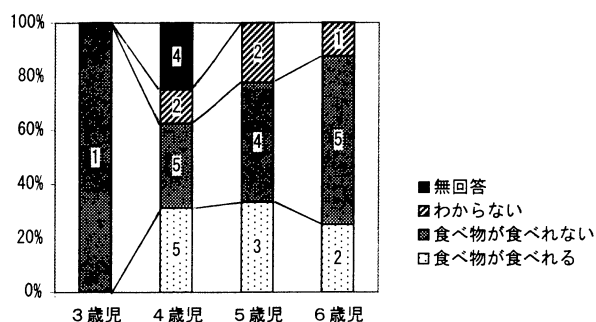


図3 死の不動性（食べる）

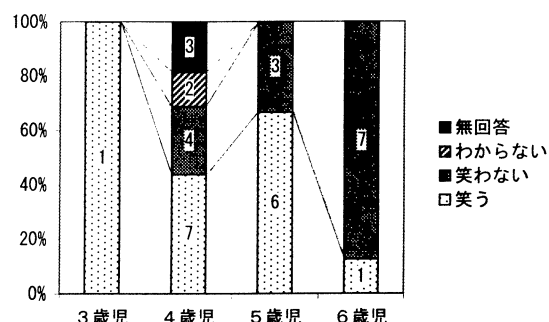


図8 死の不動性（笑う）

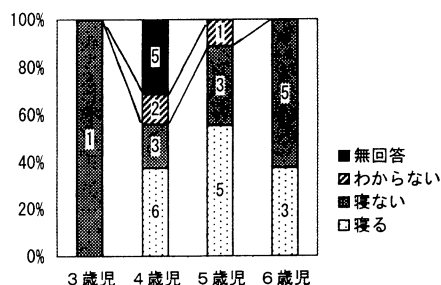


図4 死の不動性（寝る）

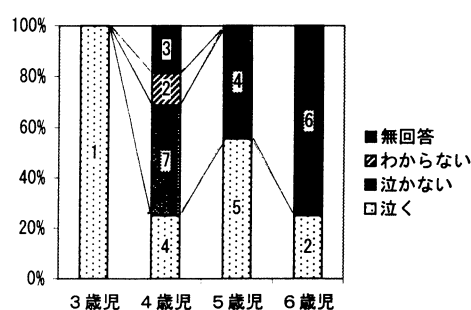


図9 死の不動性（泣く）

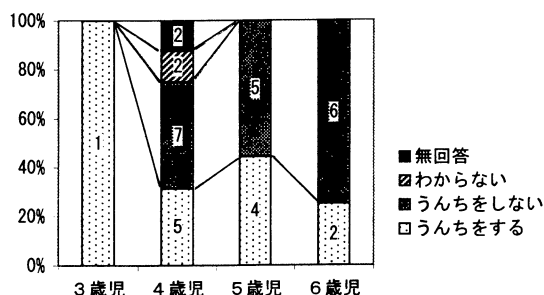


図5 死の不動性（うんちする）

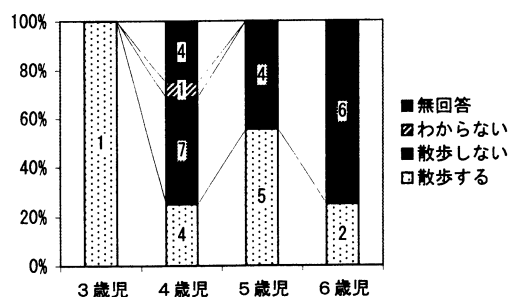


図6 死の不動性（散歩する）

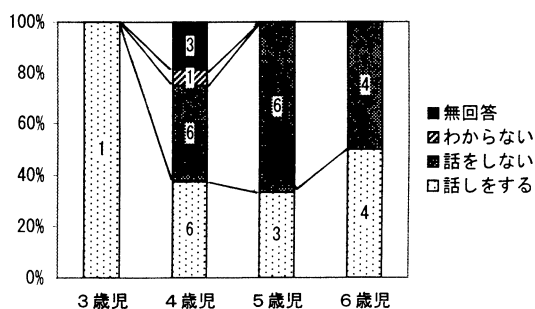


図7 死の不動性（話をする）

たり散歩したりといったイメージをより広げられることが反映したと考えられる。

死の不動性すべての質問項目を理解していた最年少の幼児は4歳7ヶ月で、5歳9ヶ月以上ではほとんどの幼児が理解していた。本研究では対象者の認知発達については調査していないため、個々の対象者の認知発達との関連については明らかにできなかった。しかしながら、発達とともに死の不動性の理解がすすむというSpeece, & Brent<sup>1)</sup>や岡田<sup>2), 11)</sup>と矛盾しないことが確認できた。

## 2. 死の不可逆性について

3～4歳児は死の不可逆性を約3割が理解し、5～6歳児になると約半数が理解していた（図10）。死の不可逆性を理解している幼児（5歳1ヶ月）からは、「（アナグマさんが生き返ることは）できん。天使になって天国に行くんよ。おばけみたいじゃけん見えんよ」という反応があった。一方死の不可逆性を理解していない4歳児に、「アナグマさんは、どうやったら生き返る？」と質問したところ、様々な反応があった（表2）。4歳児はおとぎ話の世界を思わせる反応であるが、5歳児では、死者に対して直接的に何かを行うことで生き返ると考えているようで、より現実社会と関連づけた反応が見られた。6歳児の反応で、「よいことをすれば生き返る」の反応から、死を罰とし

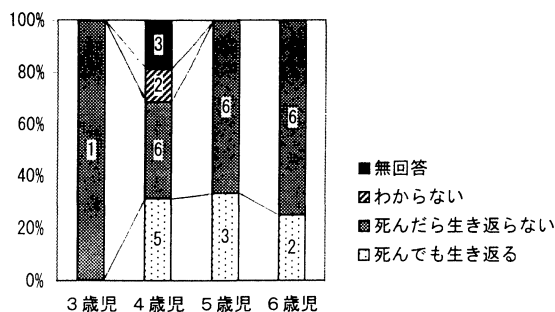


図10 死の不可逆性

表2 死の不可逆性を理解していない幼児の反応

年齢	幼児の反応（人数）
4歳児	わからない（2名） 動いて生き返る（1名） サンタがおもちゃを持ってくと生き返る（1名）
5歳児	終わってちょっと抱いたら生き返る（1名） 誰かが救急車を呼んで、注射したら生きかえる（1名）
6歳児	水を飲んだ生き返る（1名） いいことしたら生き返る（1名）

て認識することも、この頃からみられることが予測される。

死の不可逆性の理解は4歳からすでにみられるという報告<sup>8)</sup>はあるが、本調査では3歳9ヶ月児も理解していた。

### 3. 死の普遍性

死の普遍性については、4歳児以降の幼児は約半数が理解していた（図11）しかしながら、自分自身や親しい人は死なないと考えていることが多い<sup>4), 7), 11)</sup>といわれており、受け止めの内容についても検討が必要である。死の普遍性を理解している幼児（5歳1ヶ月）から、「生きとるもんはみんな死んでしまうんよ、テレビで言いよったもん」という発言があった。子どもにおける死の概念の発達には、ペットや親しい人との死による離別体

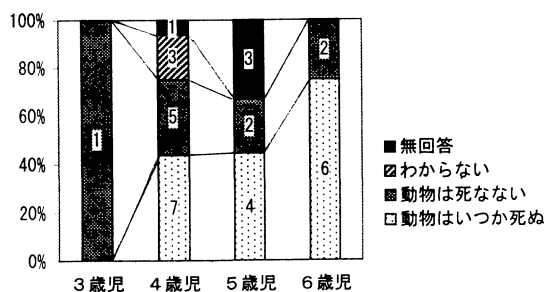


図11 死の普遍性

験、それに対する子どもの前で見せる両親の表情や反応が大きく作用する<sup>7)</sup>といわれているが、テレビなどのマス・メディアも影響していることが考えられる。

### 4. 死のイメージ

死のイメージについての質問に、3歳児は何も答えなかった。反応がみられたのは、4歳児では16名中4名、5歳児では9名中6名、6歳児で8名中4名であった。岡田ら<sup>5)</sup>は、幼児は死に対して特有のイメージを持っていないとしているが、5歳以上だと半数の幼児が何らかの死のイメージを表現していた。イメージには、「悲しい」（3名）、「死んでる」（5名）、「骨になっとる」「天国におる」「お月様になる」「食べ物食べれん」「うれしい（天国にいけるけん）」「家に帰る」「墓に埋める」（各1名）と様々だったが、学童期にみられるような恐怖や嫌悪のイメージ<sup>5)</sup>はみられない。反応の多様性は、個々の幼児が成長・発達の過程での体験が背景にあると予測される。

### 5. 調査全体を通しての幼児の反応

ほとんどの幼児が紙芝居の話は集中していた。面接になると集中力が切れてしまう幼児もいれば、面接での質問にも集中して聞く幼児もいた。面接室に使用していた場所が遊戯室であったこともあり、外から窓を叩き大きな声で注意を喚起する園児もいて、面接中の幼児の集中力が続かない場合もあった。全ての面接が終了した後に「おばあちゃんが交通事故で死んだんよ」と話す幼児（6歳3ヶ月）や、紙芝居の途中（アナグマさんは、死んでも心が残ることを知っていたのですという部分）で、「じゃあ、死んだばあちゃんも心が残るんじゃ。」と反応した幼児（6歳4ヶ月）もいた。前者は、死の3つの構成要素を全て理解していた。後者は、死の不可避性は理解しているが、不動性と不可逆性を理解していなかった。後者の幼児からは、「死んだ人は、天国で生き返るんよ。星が流れようるけど、星は死んだ人なんよ。」という回答も得られた。

幼児は成長・発達過程のなかで、さまざまな体験を取り込みながら死の概念を形成している。ひとつひとつの体験をどのように幼児が取り込んでいくかは、私たち大人によるところが大きい。健康であるかどうかに関わらず、生きる喜びや人と関わる楽しさを子どもとともに考え、感じていく

ことが、デス・エデュケーション<sup>7)</sup>につながる。年少の子どもであっても生の問題として死を考える、デス・エデュケーションに今後大いに取り組んでいくことが必要性あると考える。

## 6. 調査全体を通しての幼児の表情

3～4歳児は全体を通して無表情の場面が多かったが、「アナグマさんのお話はどうだった？」の質問にはほとんどの幼児が「おもしろかった」と答え、笑顔の反応がみられた。一方、5歳児は始終笑顔で反応し、6歳児では、無表情と笑顔をしている幼児の割合がほぼ同じであった。絵本の選択については、よみ聞かせ場面でのポジティブな反応から、適切だったと考えられる。3～4歳児における無表情の場面が多かった点は、特に面接場面での質問内容の理解が難しかったことが反映したと思われる。また、6歳児がみせた無表情については、認知発達が進むことで死を罰と考えたり、怖いと感じたりすることが背景にあると予測され、今後明らかにしていく必要がある。

## ■ 研究の限界

今回の研究では、対象者数が少なく、各年齢にもばらつきがあった。また、1ヵ所の保育所に限って調査したため限られた地域での結果となった。また、個人のプライバシーに配慮して、祖父母との同居の有無やペットを飼っているか、葬儀への参加経験の有無等についての情報はとらなかった。したがって、一般化が難しく、幼児の死の概念形成への影響要因等については深く考察できなかった。

さらに、面接を終了した幼児が窓の外から面接中の幼児に話しかけ、面接中の幼児の集中力が維

持できないなど、面接を行う環境づくりが不十分であった。今後方法論を検討し、研究を進めていく必要がある。

## ■ 結 論

幼児期のうち簡単な質問なら答えることのできる3歳以上の健常幼児における死の概念、および死のイメージについて、絵本を基に作成した紙芝居を用いて調査した。その結果、以下のことが明らかとなった。

- (1) 死の不動性は、4歳7ヶ月から理解し始め、6歳前後でほとんどの幼児が理解していた。
- (2) 死の不可逆性は、3歳9ヶ月から理解し始め、6歳前後でほとんどの幼児が理解していた。
- (3) 死の普遍性は、4歳3ヶ月から理解し始め、6歳2ヶ月以上でほとんどの幼児が理解していた。
- (4) 幼児における死の概念の発達には身近な死の経験、アニメズム、マス・メディアなどの要素が関わっていることが予測された。
- (5) 年少の子どもに対しても、生の問題として死を考えるデス・エデュケーションに取り組んでいく必要性が支持された。

**付記** 本調査実施にあたりご協力いただきました保育所の園児ならびに保育士の皆様に、心より感謝申し上げます。

本研究は、平成11年度広島県立保健福祉短期大学看護学科の卒業研究として行った調査データを、分析し直しまとめたものである。なお、本研究の一部は第47回日本小児保健学会で発表した。

## 引用文献

- 1) Speece, M. W., & Brent, S. B.: Children's understanding of Death: A Review of Three Components of a Death Concept. *Child Development* 55 (5): 1671-1986, 1984.
- 2) 岡田洋子：学童期にある小児の死の概念の発達に関わる要因の検討－認知発達と社会経験に焦点をあてて－. 天使女子短期大学紀要. 11：21-35, 1990.
- 3) 佐藤比登美, 斎藤小雪：現代の子どもの死の意識に関する研究. *小児保健研究*. 58(4)：515-526, 1999.
- 4) 仲村照子：子どもの死の概念. *発達心理学研究*. 5：61-71, 1994.
- 5) 岡田洋子, 松浦和代, 木原キヨ子：病児の「生と死」に関する意識調査. 天使女子短期大学紀要. 8：17-26, 1987.
- 6) 細谷亮太：小児がん患者のターミナルケアとデスエデュケーション. *ターミナルケア*. 1：105-109,

1991.

- 7) 藤井裕治：子どもが考える「死の概念」の発達。ターミナルケア。12(2)：88-92, 2002.
- 8) 常葉恵子, 伊藤和子, 岡田洋子, 岡堂哲雄：児童期における死の概念の発達。聖路加看護大学紀要。6：31-41, 1979.
- 9) J. バターワース・M. ハリス 神戸陽子 (訳)：幼児における認知の発達。村井潤一 (監訳)。発達心理学の基本を学ぶ—人間発達の生物学的・文化的基礎—。京都：ミネルヴァ書房, 200-222, 1997.
- 10) 大元誠：アニミズム。森橋 (監) ちょっと変わった幼児学用語集。京都：北大路書房, 17, 1996.
- 11) 岡田洋子：子どもの死の概念。小児看護。21：1445-1452, 1998.